

# 水の妖精たち



絵夢ロイ

## クリスマスイブで思い出したこと

---

楽しみにしていたクリスマスイブがやってきました。

お父さんは今日も仕事があります。

見送ってくれたケイちゃんとお母さんにお父さんは言いました。

「今日はみんなでケーキを食べよう。」

とっくに飾ってあるクリスマスツリーの周りで、

ケイちゃんはお母さんが作るクリスマスケーキのお手伝いをしました。

ケイちゃんのお母さんはケーキづくりの名人なのです。

やがて楽しみにしていた夜になりました。

ケイちゃんとお母さんは、部屋の電気を消して、クリスマスツリーに飾ったイルミネーションを見ながらお父さんの帰りを待つことにしました。

赤や青の電気がついたり消えたり。それを見ていたお母さんが言いました。

「ケイちゃん。昔、お母さんが子供だった頃、不思議なことがあったのよ。」

そう言って、お母さんは話を始めました。

## クークの思い出

---

あれはまだお母さんが小学校へあがる前のことだったの。  
ちょうどケイちゃんと同じ歳だったわ。  
家の近くに竹の林があったのよ。  
ちょうど七夕の日だったんだけど天気はあいにくの雨。  
散歩の帰りにそこを通った時、話し声が聞こえたのね。  
「そこだいてくれー。ぶつかるぞー。」  
「わー、そんなにおさないでくれー。」  
そんな声が聞こえたと思ったら、竹の木全体が揺れたの。

ザ、ザ、ザーって竹にたまっていた雨が滝のようにお母さんにふりそそいだの。  
お母さんその時、さしていた傘をくるくる回したの。  
そしたらまた声がするの。  
「あれー。目がまわるー。」  
ビックリしてあたりを見回したけど誰もいないのよ。  
お母さんは不思議に思っつぶやいたの。  
「誰なの？誰かいるの？」って。

すると驚くことに答えが返ってきたのよ。  
「あーあ、そんなに傘をまわすと目が回って真っ直ぐとべないよ。」  
お母さん思わず聞いちゃったの。  
「あなたたち、だれなの？」  
「僕たちは水の妖精。こうやって水とともに旅をしているんだ。僕は、クーク。」  
その時、傘の中へ青白く耀く光の粒がフラフラ飛びながら入ってきたのよ。  
きっと目を回していたのね。  
驚いて見ていると次から次へと耀く光の粒が入ってきたの。  
ちょうど蛍のような感じ。お母さんもうれしくなっちゃってあいさつしたのよ。

「私、ミドリ。よろしくね。」  
そうしたらまわりの小さな光の粒が一斉に答えたの。  
「僕はトーミ。私ニーナよ。僕レオン。」  
みんな水の妖精らしく涼しい青や緑、紫色に輝いてお母さんのまわりを飛んでいたわ。

お母さんはね、みんなに聞いたの。  
「何処から来たの？」  
そうしたら青白く光るクークが近づいてきて、お母さんが傘を持っている指先に止まったの。  
重さはほとんどなくて、ひんやりした感じがしたのね。  
そして言うのよ。  
「僕たちは世界中を旅しているんだ。水があるところならどこでも行くよ。」  
「いいなあ、私も行って見たいなあ。」

お母さんがそう言ったら、まわりを飛んでいた妖精たちがうれしそうに言うのよ。  
「よし僕らがいいものを見せてあげる。」

## クークとの旅

---

妖精たちは、お母さんのまわりをクルクルと同じ方向へまわり始めたのよ。  
青や緑や紫の光が合わさって、お母さんのまわりが虹のように変わってきたの。  
気がつくとお母さんは空へ舞い上がっていたのよ。まわりを見るとさっきの妖精たちの光の粒が、お母さんのまわりをずっと飛んでいるの。

空の上の方でも雨がどんどん降ってくるんだけど、雨と一緒にたくさんの水の妖精が空から舞い降りているの。みんな涼しく光り輝いていて、満天の星空を見ているような感じがしたわ。妖精同士がお話をしているのが聞こえたのよ。

「やあ、クークじゃないか。久しぶり。その人間のお嬢さんはどうしたんだい？」  
「ミドリさんていうんだ。これから我々の世界を案内するところなんだ。」  
「そうかい。思い出になるものを見せてあげてくれ。じゃあ、また会おう。」  
こんなふうに、みんな陽気にお話しをしているのよ。

気がつくとお母さんの前に真っ白に雪に覆われた山が近づいて来たわ。  
とても雄大で吸い込まれそうな感じだったわ。その山に近づくと、雪の間にも水の妖精がたくさんいるのが見えたわ。  
クークに聞いたの。

「ねえ、クーク。雪にも妖精はいるの？」  
「もちろんさ。雪だって水でできているんだよ。あの妖精たちは雪が解けるのを待っているんだ。澄んだ雪解け水となって、川を下るんだ。僕らも行ってみよう。」  
クークがそう言うと、お母さんは山の表面に沿って飛び始めたの。  
お日様が当たって雪がポタポタと水滴になっていく様子が良く見えたわ。  
それと一緒に水の妖精がダイヤモンドのように透明に輝いて、水と一緒に旅に出発していたの。

思わずお母さん言っちゃった。  
「水ってこんなにきれいなものなの？」

クークは青白く飛びながら答えたわ。  
「そうさ。どんな宝石だって一滴の水の美しさにはかなわないんだ。」  
「今度はもっといいものを見せてあげるよ。きっと驚くよ。」

お母さんの体はどんどん空高く上がって行ったわ。とうとう真っ暗な宇宙まで上がって行ったの。  
お母さんのまわりには水の妖精たちの光が飛び交っているのよ。そこでお母さんは振り返って見たの。そしたら目の下一杯に見えるのは真っ青なまん丸。水の星のように見えたの。あまりの美しさに言葉が出なかったわ。

そしたらクークが言ったわ。  
「地球、きれいだろう？」

うなずくと、クークはこう言うの。  
「ミドリちゃん。もっとビックリさせてあげよう。後ろを振り返ってごらん。」

クークにそう言われて今度は地球と反対側へ振り返ったの。  
そこは、真っ暗な宇宙なんかじゃなかったわ。  
満天の星が白く、青白く耀き、お母さんその光の中にいたの。お母さんのまわりを飛んでいた水の妖精たちもその星たちの色と同じで、もう何処にいるのか分からなくなったの。

そしたらクークの声がしたのよ。  
「ミドリちゃん。僕たち、今、何処にいるか見えないうらう？」  
「星の光に混ざってしまって分らないわ。声だけが聞こえるわ。」  
「僕たち水の妖精は、実は、星の光から生まれるんだ。だから星の光と区別ができないんだよ。さあ、そろそろ戻らないと。」

クークがそう言うと、フーと力が抜けるような感じがして、気がつくと、あの竹の下に立っていたのよ。

## クークとの再会

---

お母さんの不思議なお話が終わった時、ケイちゃんはクリスマスのイルミネーションが、満天の星空であるかのような気持ちでみつめていたのです。

その時です。ピンポンと、玄関でチャイムが鳴りました。  
お父さんが帰ってきたのです。お父さんは、  
「遅くれてごめん。外は雪になったよ。」  
と言いながら部屋に入ってきました。

「わーい。待ってました。」  
ケイちゃんがそう言うと、お母さんはケーキを切りました。  
「メリークリスマス！」

窓にはイルミネーションの光が反射しています。  
ケイちゃんは窓の外に白い雪がふわふわと落ちてきているのが見えます。  
その時ケイちゃんは気がつきました。  
窓に反射している光の数がイルミネーションの数より多いのです。

「見て、お母さん。水の妖精たちだ。雪と一緒に降りてきている。」  
窓を開けて空を見上げると、次から次へと小さな光が空から舞い降りてくるのが見えました。すると一つの青白く耀く光の粒が、フワフワと部屋の中に入ってきました。

お母さんは驚いて、言いました。  
「あなたは、あの時のクーク？」

「そうですよ。ミドリさんが僕たちを呼びよせたんだ。さっき僕たちの話をしたでしょ？そこにいるのはお嬢さんですか？」

ケイちゃんは光の粒に近づき言いました。

「私、娘のケイです。よろしく。お母さんからあなたのお話を聞きました。」  
すると青白く耀く光の粒はフワフワと、ケイちゃんの肩にとまりました。そしてクークはケイちゃんに言いました。

「ケイちゃんが大きくなったら、今日お母さんがしたように、僕ら水の妖精のことを子供に話してあげるのかな？」

ケイちゃんはずっと昔からクークを知っているような気がしました。

肩にとまっているクークにケイちゃんは言いました。

「うん、絶対に、話してきかせます。」

それを聞いたクークの光が点滅しました。

「その時、また、お会いしましょう。では皆さん、お元気で。メリークリスマス。」

そう言うと、クークはケイちゃんの肩から舞い上がり、みんなのまわりを1周すると窓から出て行きました。全員がクークを追うように窓際に立ちました。するとどうでしょう。雪とともに降りてくる水の妖精の耀きが増しました。空のはるか上の方も水の妖精の光で埋めつくされました。それを見たお母さんが言いました。

「あっ。これ。私が子供の頃クークに見せてもらった宇宙と同じよ。」お父さんは、お母さんとケイちゃんの肩を抱き、空を見ながら言いました。「きっとこれは、水の妖精たちからのクリスマスプレゼントなんだ。今日の出来事を忘れないようにしよう。」ケイちゃんはどうも、言いました。

「水の妖精は星の光から生まれてくるって、本当なんだ。だから水は美しいのね。」

ケイちゃんが大きくなった時、約束どおり、クークはまた現れるのでしょうか？

地球に水があるかぎり、水の妖精はきっと現れますとも。

あなたのところにも。

おわり